



ひまわり迷路



ひまわり畑結婚式

「」の集落の特長は、老年世代と若年世代が相互に影響し合い、特に若年世代の情熱的な取組が原動力となっており、農業の活性化、若者の定住化等につながっていることである。このことを象徴するのが、集落外から戻ってきた若者たちが団結して始めた「ひまわりロードプロジェクト」である。「楽しい」と思ったことは、「すぐに」、「できることから」、「まず」はやってみる、でも決して「背伸びはしない」。この五点が田代自治会ひまわりロードプロジェクトのモットーである、と言う。

ひまわりロードプロジェクトとは、地域の活性化を目的として、農道沿いや農用施設周辺を「ひまわり」で囲む。さらに、転作田に植えた「ひまわり」で「迷路」を作って集落内外の子どもたちがタイムレースを競って楽しむ。プロジェクトメンバーが「ひまわり」畑で結婚式

### 天皇杯のむらづくりを訪ねて 3

## “むらづくり”部門で天皇杯に輝いた 『田代自治会』

(宮崎県えびの市)

農林水産祭中央審査委員長

千賀 裕太郎

を挙げたこともあって、このプロジェクトは新聞にも大きく取り上げられ、田代集落の活動が一躍有名になった。さらに、ここで採取されたひまわりの種から食用油を製造する組織も作られ、集落内の児童には、搾油体験を通じた「食育」の機会も提供されている。まさに世代を超えて楽しく参加する様が眼に映る。

もとより、ベースとなる農業生産活動は、この間とても活発化している。青く澄む湧水を溜める「陣の池」からの用水をたっぷり利用して、減農薬、減化学肥料による高品質米の栽培に加え、台地上では露地・施設園芸が盛んで、里芋、ほうれん草、ピーマン、イチゴなど多種多様な営農が展開されている。

とは言え、本地域で「中山間地域農村活性化総合整備事業」が実施される平成四年度以前は、不整形の小区画田群に各戸の持ち分が散在している状況で、生産効率は決して高くはなかった。しかし同事業によって農業基盤整備と所有区画の整理統合が行われ、事業前には市平均の七割程度と低水準であった集落の平均所得は、市の平均レベルにまで押し上げられた。

平成十二年



陣の池



整備事業前



整備事業後

度に創設された中山間地域等直接支払交付金事業を通じて、「集落内の資源はすべて地区住民の財産である」との考えを非農家を含む集落全員に浸透させたこともあって、平成十九年度には「農地・水・環境保全向上対策事業」が始まった。そこで、急速に進行する高齢化に対応するための条件づくりを進めようとの機運が高まり、農作業受託の窓口・受け皿としての「田代農用地利用組合」が同年結成された。

初年度一ヘクタールに始まった作業受託面積は、以後順調に推移し、平成二十四年度には五名のオペレーターが、水稲・飼料作物を中心に、植付け、収穫、畦畔管理等の作業で延べ八ヘクタールを受託しており、その面積は今も拡大傾向にある。

こうした中、集落の認定農業者数は、四経営体（平成十九年度）から一三経営体（平成二十四度）に増加した。このうち一一経営体には後継者があり、五経営体では既に二〇代から四〇代への経営移譲がなされている。また農道や水路の管理や除草など、一人では困難な保全管理活動は、集落住民総出で実施されている。非農家も積極的に話し合いに参加し、様々な協力体制が稼働しているのである。

これまで将来に不安を抱えていた高齢者農家にとっては、地区内の農作業委託先が明確になったことに加えて、若者がオペレーターとしてがんばり、地域における一〇年先の経営見通しがたつようになって、安心感を持つことができるようになってきた。このため、地区内には

目立った耕作放棄地は確認されていない。

田代集落の生活環境や文化の面でも、重要な変化が認められる。かつての集落の若者たちは、就職などのために集落外に居住することが多かった。ところが今は、若者たちのなかに、自分たちの子どもを集落の豊かな自然と郷土文化のなかで育てよう、との機運が盛り上がっている。「十五夜祭」「竹はしらかし」等の旧薩摩藩由来の郷土芸能が現在でも数多く受け継がれており、中でも四〇〇年以上継承されている五穀豊穡を祈願する祭りの「打植祭」は、平成十三年に宮崎県無形民俗文化財に指定されている。こうした郷土芸能を継承する活動を通じ、集落の一体感と世代間の親交が、ますます深められているのである。

資料：公益財団法人日本農林漁業振興会編「平成二十五年  
度農林水産祭受賞者の業績」



打植祭